

## 平成30年度第1回島田市総合教育会議議事録

日 時	平成30年7月3日(火)午前10時00分～午前11時38分
会 場	島田市役所 第3委員会室
出席者	染谷絹代市長、濱田和彦教育長、北島正委員、牧野高彦委員、秋田美八子委員、原喜恵子委員
欠席者	
傍聴人	21人
説明のための出席者	畑教育部長、平松教育総務課長、南條社会教育課長、駒形戦略推進課長、西本学校教育課指導主事
会期及び会議時間	平成30年7月3日(火)午前10時00分～午前11時38分
議事	「島田市の地育の取組について」 ～地域の教育力を高めるための取組～
染谷市長	開 会 午前10時00分 定刻になりましたので、ただいまから第1回総合教育会議を開会いたします。
染谷市長	<b>市長挨拶</b> 開会に当たりまして、一言ご挨拶を申し上げます。 本日は、お忙しい中当会議にご出席をいただきまして、まことにありがとうございます。 さて、学校現場に関するここ最近の話題といたしましては、大阪で発生した震度6弱の地震の際に小学生が学校のブロック塀の倒壊に巻き込まれて亡くなるという痛ましい事件がありました。当市においても同様な事例がないか、事件後直ちに、翌日ですね、確認をいたし、問題なしという報告を受けております。また、藤枝市では小学校4年生の児童が下校中に頭部を切りつけられるという事件も発生いたしました。 これらの事件は決して他人事ではありません。特に後者の事件では、地域の方との連携強化ということも大きなテーマとなってくるのではないのでしょうか。子供たちの命をどのように守っていくか、私たちに課せられた課題であると考えております。 さて、昨年の総合教育会議では、教職員の多忙化解消の具体的な取り組みとして、夏休み期間中に学校閉庁日を設けることについて、そして部活動の計画的な休業日の設定について、この総合教育会議において意見を出し、本年度実施する方向で調整が進んでいると伺っております。 このようにこの総合教育会議での意見が市の教育行政における課題

染谷市長

濱田教育長

解決につながっていけばと思いますので、今後も教育委員の皆様からも、ぜひより魅力のある島田の教育の実現のためにご意見、ご提案、ご要望をいただきたいと存じます。

さて、喫緊の課題でもあります学校の適正配置についてですが、現在、検討委員会において検討がされているところであり、先日は検討委員会からの中間報告をもとに、初倉地区と北部地区において、地域住民の方との意見交換会を実施したところであります。将来の子供たちの教育のために何が一番大切なのかを行政はもちろんのこと、地域、保護者、そして教育関係者などが皆さんで考えていく。まさに島田市の教育大綱に掲げる市民総がかりということでの取り組みになります。この総合教育会議においても、いずれ検討しなければならない課題だと考えております。その際には、またよろしくお願いを申し上げます。

### 教育長挨拶

ここで濱田教育長からご挨拶をいただきたいと思います。

教育長、よろしくお願ひします。

皆さん、おはようございます。

きょうは参加をいただきましてありがとうございます。

市長から危機管理等についてお話がありましたから、私はきょうのテーマに沿ったお話をさせていただきたいと思います。

島田市は、大変地域の教育力の高い地域だと思っています。その一つの証拠として、金谷、そして六合の公民館が2年連続の文部科学大臣賞を受賞しています。また、商工会青年部が行っていますジュニエコも文部科学大臣賞をキャリア教育の部門で受賞しています。こういうことが一つの例として挙げられるのではないかなと思います。地域の教育力、これ以外にもたくさんあると思いますが、そういう中で子供たちは豊かな体験をしていますし、また各学校も地域の力をかりて教育活動を充実させているのではないかなと思っています。

小学校、中学校のあり方検討委員会の提言が28年度に出ましたが、その中では夢育・地育の推進、充実が述べられています。その中で特に地域を作る子供の育成という大きなビジョンまで述べられています。平成27年度の成人式のアンケート調査では、島田が好きな成人、この方の82%という大変多くの人たちが「島田に住みたい」と答えています。これらのことを合わせて考えますと、島田が好きな子、こういう子供を育てることは大変重要なことでもありますし、また、地域の教育力を生かした子供支援、子供育成を充実するという事は、島田市の活性化にも必ずつながっていくのではないかなと思っています。

市長におかれましても、自治推進委員会で地域の教育力についてのお話をいただきました。そのようなこともありまして、地域主催の寺子屋事業も動き始めています。本日の話し合いによって、これまでで以

染谷市長

上に地域の教育力を生かした教育の充実というのが図れたらと思っています。

きょうは、皆さんの活発なご意見をいただけたらと思います。よろしくお願ひいたします。

ありがとうございました。

染谷市長

### 議事

それでは、次第に従いまして、議事に入りたいと思います。

今回のテーマは、「島田市の地育の取組について」です。先ほど濱田教育長からもお話がありましたが、島田市は社会教育が大変充実しており、国からもお褒めの言葉をいただいているところですが、今回は地域の教育力を高めるための取り組みとして、幾つかの事例について事務局から紹介をしていただき、その後、皆さんから感想や質問などがありましたら伺っていきたくと思います。

それではまず、社会教育課から説明をお願いし、その後、引き続いて学校教育課から学校での夢育・地育の取組について説明をお願いします。

南條社会教育課長

社会教育課から地域の教育力について、社会教育、あるいは生涯学習の視点からご紹介をしたいと思います。

まず、教育長のご挨拶の中にもありましたように、地方創生の時代に人口が減少していく中で、将来地域を担う子供たち、地域を愛し、地域に役立つ子供たちを育てていくというのは、これは喫緊の課題と考えております。

そういう中で、平成27年にさきに中央教育審議会が出した答申がございまして、こちらをご紹介し、後半で幾つか事例を紹介したいと思います。

新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方法について、という答申がされております。この中で地域の教育力について語られております。

具体的には、都市化の進行、過疎化の進行、あるいは家族形態の変容、特に核家族化、あるいは個人の価値観、ライフスタイルの多様化ということから、地域社会のつながりや支えが希薄化してくると言われております。地域の学校、あるいは地域で育てる子供たちという考え方が失われてきているのではないかと考えております。こうした中で、地域社会の教育力が低下している、とこの答申では指摘しております。

そうした中で、地域コミュニティを創生、あるいは再生する動きもございまして。地域住民、あるいは保護者が自らの子供たちに積極的に関わり支援することで、自分たちの手で子供たちを育てていこうという意識が生まれ、取り組みが始まっているとしています。こうした動きは、かつての地縁の再生にとどまらず、新たな地域コミュニティの

創設につながっているともしています。こうした取り組みが地域社会に広がることによって、地域全体で互いの幸せについて考え、何ができるかを問い、学び続ける地域社会が形成されていくのではないかとしています。

こうしたことから、具体的には学校と地域の連携・協働が必要だとし、地域学校協働活動ということが社会教育法に明記されたところです。

これを受けて、行政が関わる活動としましては、地域学校協働活動として、地域のさまざまな個人や組織がさまざまな形態で互いの強みを生かしながらより効果的な支援を展開していくことが大事としております。

資料は3ページ、4ページになりますが、体系として整理をされた図がこちらでございます。

一番外側の輪の中にPTAや社会教育団体を初めとする地域の活動体があります。内側のサークルは、具体的な各取り組みをカテゴリ別に示したものです。この地域学校協働活動という取り組みを軸にし、学校教育、家庭教育、あるいは社会教育という取り組みの中で回していこうという概念図が示されております。ここでポイントとしましては、こうした活動体が緩やかなネットワークを形成していくことが大事ではないかと言われております。これらの活動エリアとしましては、物理的には小学校区が最大と考えられます。これは、小学生が実際に活動できる範囲を示しています。しかしながら、実際は地域の実情に応じて、もっとより狭い町内会単位であるとか、それぞれの地域に合わせた活動のエリア、あるいは形態が考えられます。

具体的には、推進体制としまして、こうした概念図が示されております。A、B、Cというのは各学校単位の協働組織を表しています。市全体に統括的なコーディネーターを配置して、それぞれ学校ごとに地域コーディネーターという役割を持つ者を配置して、それぞれ緩やかなつながりを調整して、具体的にはこうした学校支援であるとか、土曜日の教育活動などのカテゴリの活動をしましよと示されております。

島田市でも具体的には島田二中の学校支援であるとか、ただいまご紹介ありましたはつらの寺子屋、それから土曜日に関しては六合チャレンジクラブ、放課後の子ども教室に関してはフレンズという活動をしております。家庭教育では、中学生を対象としたあかちゃんとその親子のふれあい活動であるとか、この後は地域が主体となった活動ですけれども、湯日の子ども達を見守る会などの動きが活発になってきております。そして、最後ですが、学校によるまちづくりとしては、川根小の川根ラブアクションが特筆するものと思われま。

では、ここからは事例を紹介させていただきます。

資料は5ページからです。

前半は社会教育課と地域の方々の協働で進めている事業でございます。

しまだはつくら寺子屋は、県の委託事業を受けまして昨年度から展開する事業です。初倉地区の小学3年生の特に算数の学習支援を行っております。教員の経験がある公民館長がコーディネーター役となり、市の係長であるセンター長が各機関と調整をとりながら、互いに強みを発揮して連携をしています。学習ボランティアに教員のOBの方々とか大学生とか、今年度については初倉中の中学生も応援に来てくれております。

続いて事例の2です。資料は7ページになります。

歴史ある取り組みですが、少年育成教室しまだガンバという取り組みがあります。これは、全市の小学生を対象に展開しております。ここでの特徴としましては、この自然体験に中学生、あるいは高校生のリーダーが加わって、先輩のお姉さん、お兄さん方が支援してくださる。この方々がさらに若い指導員となって、さらにベテランの指導員になるという学びの循環ができていないかと思えます。こうした取り組みが、人数は30人、あるいは40人という限られた人数であります。将来島田市を背負っていくリーダーとして活躍していただけるのではないかと考えております。

事例の3でございます。

次のページになりますが、六合子どもチャレンジクラブです。こちらは、先ほどご紹介しましたとおり、週休2日制が導入されたときに土曜日の子供たちの学習支援、養育支援をどうするかという中で始まった取り組みです。事務局に公民館長、教員の経験がございますけれども、中心として、地域の人材、特に教員のOBの方々に、さらに地域の一般の方々が加わって人材の広がりがある事業でございます。

次に、事例の4ですが、はつくら里の楽校というものがございます。これは、公民館と児童館がタイアップして進めている事業です。地域の方々の全面的なバックアップを受けまして、地域の方々と子供たちがさまざまな、特に自然体験を通して社会性を培っています。この特徴としましては、炭焼き体験がございます。この炭焼きは一時期存続が危ぶまれておりましたけれども、子供たちがこうした体験を続けるために必要だということで、逆に子供たちの活動が地域を元気づけているという好例かと思われます。

次に、放課後の子供たちの居場所の支援ですけれども、フレンズクラブというものを展開しております。これは地域のボランティアの方々に負うところが非常に大きいのですが、年間を通じて活動、たくさんの方々と交流しさまざまな活動ができます。これによって社会性の向上に非常に高い効果があると考えております。

続きまして、地域の方が主導している活動をご紹介します。

まず事例の6ですが、湯日の子ども達を見守る会でございます。これは、湯日地区は家が点在しておりまして、子供たちが帰った後、家から出て放課後遊ぶことができにくい状況にあるという課題を、町内会長さんたちが抱えていらっしゃいました。その町内会長さんの同級生の方がリタイヤされて東京から来たときに、一緒になって何かできないかということで発案されたものだそうです。地域の高齢者の方々とか関係団体の方々に声をかけたところ、初倉西部ふれあいセンターでなるべくたくさん子供たちを集めて、お年寄りとの触れ合いの中で見守っていこうと始まったものだそうです。週3回ほどやられていることで、ほとんど地域の子供たちが来ているという非常に好例だと思います。

続いて、昨年からはじめました地域での寺子屋事業を紹介します。

三ツ合町で始まった事業です。これは、自治会と子供会、それから地域の方々が夏休み等で子供たちを学習支援をしようとするものです。伺ったところ、たまたま三ツ合町の地域の中に教員経験をされている方がいらっしゃって、こういう体制がとれたと伺っております。教育委員の秋田さんも関わっていただいています。補足があればお願いしたいと思います。

昨年伺ったときには、2階で低学年の学習支援、1階で高学年の学習支援をされているということで、ことしはそれ以外にもいろんな遊びなどもやると聞いておりますが、さまざまな工夫を凝らしてやられているという事例でございます。

続きまして、なかみぞさんちという取り組みをご紹介します。

中溝町で行われている駄菓子屋さんという仕立てを使った放課後の学習支援という、寺子屋ということです。もともとは若い保護者のお母さん方が駄菓子屋をやりたいと思いつき、それを町内会長さんとか老人クラブの方々、あるいは民生委員さんに相談したら、やろう、やろうと盛り上がったそうです。この駄菓子屋さんという仕立てがとても良かったのは、リタイヤされた昭和のおじ様方に非常にうけて、支援する側も一緒に楽しめるという取り組みで、駄菓子屋さんというのは仕立てとしては非常に良かったとおっしゃっていました。

以上、雑駁で駆け足のご説明でございましたけれども、地域の活動をご紹介します。ご清聴ありがとうございます。

学校教育課からは、今回4つ大きく視点をもってお話をさせていただきたいと思っています。1つ目は、先ほど来話がありました夢育・地育という研究指定を行っていますので、そちらの取り組み、2つ目は、川根小学校で行っている取り組みについて、3つ目は、相賀小、島三小に関わる取り組みについて、最後は社会に開かれた教育課程ということを含めてまとめをさせていただきたいと思っています。よろしく

お願いします。

まず、夢育・地育という言葉が使われていますが、この夢育・地育は、夢育、子供たちの未来に向けた夢を育むということと地育、地域に根差して成長し、自ら地域を育てていく子供を育むという造語ですけれども、地域の人的・物的資源を活用したり、社会教育との連携を図ったりして、地域総ぐるみで未来の、今回は初倉地区を指定していますので、初倉を担う子供を育てるということで、そもそもは島田市における教育のあり方検討会の提言書から来ている言葉になります。

特に今回基本の方向性の5項目の中で、地域が主体性を持って教育に参画する、地域の文化や伝統を継続するために地域が主体性を持って教育機能を分担する仕組みを整えるという2項目がきょうの話のメインになると思います。

実際に初倉地区では大きく3つの視点を持って研究指定に取り組んでいます。1つはコミュニケーション能力の育成、2つ目は地域資源、人、もの、ことの活用、3つ目は小中の学校が連携した教育の推進をするということで、きょうは特にこの中でも、地域資源についての話をさせていただきます。

まず、地域資源の活用の一つ目として、コミュニティスクールにつながる島田市独自の体制づくりを2年間かけて行ってきています。具体的には、実際にこの2年間で校長が学校で行われるPTA総会での話で、この夢育・地育はどういうことなのか、それと、どういう子供を育てたいのかという説明をしていますが、それだけではなくて、民生児童委員会の協議会に出向いて校長がこういう子供たちを初倉地区みんなで育てていくと説明をしたり、初倉コミュニティ総会にも出て、リーフレットを配布しながら同じように、こういう子供たちを育てていきますので、家庭と地域、こうした役割でぜひ協働、同じようなスタンスで取り組んでくださいという話をさせてもらっています。つまり初倉の子供を中心に、初倉を動かしていこうということで、学校は学校で、何とかそのカリキュラム、教育課程を地域と共に子供が育めるような、教科の接続を考えたり、地域にはどういう資源があるかということで、そちらを提供いただいたりという関係性を築こうと考えてきています。

例えば、ジュニエコの話がありましたが、これはそもそも商工会がやっている既存の起業体験に学校が会場を提供したり、こういう趣旨で活動をやっているんだよと子供に紹介したりして、もともとある地域の教育力に学校が連携・協力することで、地域資源とのつながりを非常に簡単にやれたことがあげられます。

そのほかですと、先ほど来話がありましたしまだはつくら寺子屋事業についても、公民館長のコーディネーターを中心に地域の方から学

習支援をしていただいていたたり、学校は学校で、敷居を低くして地域の方に来ていただいて、初倉の地名や歴史を学ぶ機会を設けたり、また、学校は子供たちに表現する場として、地域のお祭りに参加したり、子供会という組織と協働で清掃活動を考えて、公共で利用する場を清掃活動に取り組んだということが行われてきています。

また、大変若い世代の卒業生、初倉中学校から卒業して、そして初倉地区で働いている方たちに職業講話に実際に来てもらう、世代があまり遠くない、そういう方たちに来てもらって、働く意義等、話をしてもらったり、地域の方がちょうど初倉地区全部の小中学校で初倉検定という地域を知るという検定を作っているのですが、そうしたことに関連づけて、地域の方から資料等をいただいたりというような、非常に有機的なつながりが生まれてきています。

まとめになりますが、学校が積極的に地域へ発信する姿勢を持って、そして、地域の人も学校に入ってきて交流する場を設けていくということが、その体制を作るというか、仕組みを作ることで、地域の教育力が高まっていくという一つの事例と考えています。まだ継続中の実践ですが、今後引き続き取り組んでいこうと考えています。

2つ目です。

川根小の取り組みになりますが、川根小は「みんなの学校」ということで、みんなの学校というのは何か。協働ということを含言葉に川根ラブアクションと名づけて、学校の子供たちが地域の人、もの、こと、川根のためになること、自分がやりたいことを、自分ができることを思う存分やるということで取り組みを行っている活動になります。

例えば各学年の実践でいいますと、畑で育てるといのはよくやることですが、これで終わらずに、サツマイモを作ったら、それを地域の方に振る舞おうと、そういう触れ合う機会を作ろうと、自分たちがやってみたいことで地域の方に振る舞っていくことを1年生でもやっていますし、2年生では、地元の方たちの仕事を体験したいということで、地元の方たちに協力をいただいている。3年生は、川根の名物を詳しく知ろうということで、仕事も含めてお茶に関する体験に向向いていく。4年生はお年寄りとの体験。併せて、その方たちと触れ合う中でお年寄りを喜ばせたいということで、こうした活動を学校の中でも、もしくは老人ホーム等へ出向いて取り組んでいます。

また、ちょうど去年の実践になりますが、フォトロゲイニングという大会が川根地区で行われまして、これにぜひ参加して川根をPRしようということになりました。子供たちは学習の一環として、どうすることで川根をPRできるか、まず計画をし、地元の人たちに川根の特産は何かと聞き取りをして、ではお茶を入れて飲んでいただいたらど



うかということで、地元の人にも来ていただいて、お茶の入れ方等を学び、実際に本番の大会のときに川根の名産やお茶を振る舞うということをやりました。学習が教室で終わるのではなく、こうした地元の行事にそのまま直接生きてくる活動に取り組んだことがあります。

川根の皆さんに大変協力をいただきながら、子供が川根自体を好きになるということ、これは子供の笑顔を見たい、川根を元気な町にしたいということで、一番は学校、校長を含めたリーダーシップで地域に思いを語って学校を開いていく、そういう姿勢から生まれてきた活動となります。

いずれにしても子供が地域の宝であることにこうした活動で気づかせていくことや、地域としてできることを役割分担することで、子供を通して地縁の再生を図る、それだけではなくて、地域の教育力を高めていくことにつながっていく活動が行われています。

3点目ですが、相賀小、島三小につきましては、こちらも伝統的に取り組んでいる相賀谷太鼓、これは育成会というものがあって、実際に教員ができない技術指導などについて、協力いただいて練習にも参加してもらおう。併せて、子供たちは地域のお祭り等にも参加して披露していく。また、実際に育成会の方たちからすばらしい演奏を聞かせてもらうことで、こういうふうになりたいという仕組みを作っていく。

三小についても同じですが、大祭で行われる鹿島踊について、保存会の皆さんに定期的に来ていただく中で、鹿島踊りの歴史や実技指導をしていただき、運動会でも披露しています。当然大祭のときにも、一部の人になるかもしれませんが、実際に参加して、鹿島踊を披露していく。当然この子たちが大人になったら、今度は見守る側となって、子供たちに教えていく。学校が伝統を継承していく場になっているわけです。

この三小と相賀小の実践については和文化教育とも大きく関係するのですが、地元にある団体等の力を、学校現場に入っただきながら、組織自体もそれによって活性化していくということで、地域の教育力が高まっていく事例となると思います。

4つ目ですが、今後、子供たちに求められる力というのは、非常に変化の激しい社会ですので、学校だけにとどまらずに、社会と連携、協働を重視していき、学校の特色を作っていく形になると思います。子供は子供、教員も教員ですが、意識改革をして、地域に学習材料を求めたり表現する場にしていくことが必要ですし、地域も地域を担う人材の育成をぜひ頭の中に入れていただきながら、双方での好循環を生み出していく。実は、そのためにはコーディネーターとなる方が必要で、この方の役割が非常に重要なキーマンに今後なっていくだろうと思っています。

染谷市長

最後になりますが、キーワードは「つながる」になると思います。保護者、地域、学校、そうしたものが全てつながるということが、この地域の教育力を高めるという点では、重要になってくるのではないかと考えています。ありがとうございました。

事務局の方々、ありがとうございました。

北島委員

それでは、ただいまの説明に対する事務局への質問のほか、地域の教育力を高める取り組みについて、こんなことをしていったらもっと充実するのではないかと、日ごろから教育委員の皆様が感じていることについて、一人一人ご意見を伺いたいと思いますが、トップバッターに北島委員、いかがでしょうか。

今の特に行政サイドでいろいろと仕組みを作っていて、非常にきめ細かく、もうこれ以上ないのではないと思うぐらいやっていたらということ、非常にありがたいと思いながら聞いておりました。

組織的にやるというのは、当然現代社会では必要なことだと思うのですが、一つ落とし穴があることは、もちろんご承知だと思います。いろいろなネガティブな結果が出てきてしまうことがあります。例えば2日前、6月30日のある新聞に出ていたものですが、これは岐阜県の西濃地方の小学校での事件ですが、さる女性がどうしてもPTAの会員としての活動が難しい。仕事もできなくなってしまいそう、家庭も壊れそうということで、いろいろと相談したり調べたりすると、PTAは任意団体であって、退会も実は自由にできるということが分かって、意を決して、例えばプール掃除など協力できることはしますので、会員としては退会したいということで退会をしたのですが、そのときの幹部の言葉が何といいますか、ほぼ義務なのだという、子供を産んだ以上は義務なのだというような言い方。それから、地域にいづらくなるよとか、子供がいじめられる原因になるかもみたいな脅しと言えそうなことをいろいろ言われて、結局のところどうなったかという、一つは登下校ですね、集団通学をここではしているそうですけれども、そこから外されてしまったというのですね。送り迎えを親が自らしなくてはならなくなってしまった。いろいろと学校に訴えても、PTAは任意団体であって、教育委員会で指導、管理する権限がないので、これはできないんだと。PTAでそうおっしゃるなら、その内部の問題であるということで、どうにも困ったと。

こういうふうに、ある組織というのはとてもうまくいっているときはいいんですけれども、今度は組織を維持するための膨大なエネルギーが実際に必要です。そこでボタンのかけ違いをすると、今度はそのために形だけにこだわる人もいますし、いろんなトラブルを起こしてくるという側面があるということ、一つ、よく承知しておかねばな

らないと思います。

それと同じようなことですが、異質の文化、今紹介いただいたのも地域によっていろいろと質の違うものがあります。それがあはるとも豊かなのですけれども、逆に言うと異質の文化を持っている子供たちを更に区別しないといいますか、差別しないといいますか、そういう意識。異質のものを受け入れるという志といいますか、心を育てなくてはならない。これが欠けていますと、自分のところだけが、関わっているものだけに価値があつて、そのほかのものは認められない。少し違ふと違和感がある。こういうことが余り徹底し過ぎることによつて、教育がきめ細かく厳密に行われ過ぎることによつて、こういうことが起こってくることも一面心配されるのですね。

もう一つ、長くなりますが、よろしいですか。

一部の方にはお話したのですが、最近、おもしろい本を読みました。新聞で知つたのですが、「おじさん・おばさん論」というタイトルのついた海野弘という方の著書で2011年に発行されている本です。島田の図書館にはありましたが、本屋には売っていませんでした。既に、新品は手に入らないと思います。

要点は何かというと、おじさん、おばさんというのは、本当は子供たちに惜しげもなく愛を注いでいるんな知識とか財産とか、いろいろなものをくれる、贈ってくれる。彼らが大人になると、ひっそりと去つていつの間にか忘れられてしまう。

2年前の校長会の新年会でお話したサンタクロースと同じような役割、機能を持っているありがたい存在であつたのですが、私たちの父親、母親はたくさん兄弟がいましたから、おじさん、おばさん、いっぱいいますけれども、今は少ないですね。まさに消えつつあります。少子化の中でおじさん、おばさんがいなくなっていますが、子供たちは上下の垂直の関係の親たちだけで、果たしてこの世の中を渡っていく力を付けることができるのでしょうか。もちろん学校では友だちがいます。横のつながりももちろんありますが、でも縦と横だけで大丈夫でしょうか。おじさん、おばさんは、かつては斜めの見方でいろいろなアドバイスをしてくれたと思います。とても複雑になります。多くなりますと、いろいろな価値観を持ったおじさん、おばさんがいて、同じことでもいろいろな意見を言います。でも、それは損得抜きによかれと思つて、はずみでもあるかもしれませんが、してくれたことでしょう。でも、これがなくなつてきています。

これは今、近所のおじさん、おばさん、漢字で書くと、小さな父とか小さな母と書いて小父、小母さんと書く近所の人たち。昔から、遠い親戚より近くの他人とことわざでも言われますけれども、よく考えるとぴったりでして、要するにおじさん、おばさんが近くのおじさん、

おばさんになって、その役割を代替してくれる。こういう役割が今の社会に構造的に抜けているんだと。それで地域の活動がまた起こってくるんだと思うんです。コーディネーターだとかいろんな言い方で出てまいりました、地域の協力してくれる大人です。今のスライドの中に出てきた大人の顔をした人は、本当はそのおじさん、おばさんの役割を、その機能を受け持っていたいただきたい人たちなのですね。

これがまさに今、本当に喫緊の必要な人材なのだということ。コーディネーターだとか何とかと名前を付けますととても大きなものになって、どういうことかかえって分かりにくいのかもかもしれません。何か辞令をもらわないとやれないのかとか、権限があるのかとか、そんな難しいことではなくて、本当は困ったときにちょっとでも助けてくれるおじさん、おばさんがいるかないかということだろうと思うのですね。

それから、今たまたまですが、いろんなところで太鼓であるとか鹿島踊であるとか、伝統芸能のようなものがたくさんありました。でも、その前に何があったかという、何もなかったんですね。そこで誰かが始めたのです。ですから、伝統というのは守るということと今、とても強調されると僕は受け取りました。気をつけないといけないのは、伝統はどんどん壊しながら進んでいくんですね。守るというマインドになった途端に廃れます、形だけ、形骸化していきます。今度はそれを守るために無駄なエネルギーを使うことは、本末転倒だと思うのですね。このところは勘違いしないでいただきたいと思います。

これは幾つかの根拠があります。人からかつて聞いた話です、例えば黒川能の下座の能太夫は、500年以上続いている伝統をどうやって維持していくのか、それはどんどん変えることです。守るというマインドはありませんということです。どんどん変えなくてはいけないのです。始まりだって大変革というか、革命的な動きで作り上げたわけです、観阿弥・世阿弥が。それを何百年も、500年以上も続いているということは、その時代に合わなければ続かないわけですが、守るというマインドがそこに働き始めると、目に見えるものをみんなで見、それを残そうとします。見えないものが今度はなくなってしまいます。つまり形だけ残った遺体です、遺骸です。心が入っていません、命がありません。それを一生懸命、形、見えるものを残そうというのはとてもばかなことです。したがって、どんどん変革をしないと、伝統というものは続かないものだ。水鷗流という武術の宗家もやはり同じことを言っていました。先ほどの太夫とは全く関係のない人ですけれども、どんどん変わっていくんだと。進化がないところにその伝統は続かないんだと。

それからいろんなことを考えますと、伝統文化というものを最初に

作り上げたときには、永遠に到達できないテーマを含んでいると思います。だけど、何かありそうなもの。これは世阿弥に言わせると、花というふうに表現していますね、花です。秘すれば花であるとか、風姿花伝のこの花です。あるというふうに思います。確かにこれが花だとみんなは納得します。でも、その次の世代は、今まで見たことのない花をまた表現するかもしれない。つまり切りがないのですね。

そういうものを含めて見つけていくところに伝統があるわけです。難しい深いところですけども、スライドで見ますと、これがそうだな、でもそれはただ一つの花にすぎないわけですし、これを壊して新しいものを作る、改革をしていく人物が出てくるわけですね。まさにその人物を育てるところに教育があるわけですし、既にあるものをただ守っていく。

先ほど、炭焼きの技術がなくなるといけないから、実際には必要がないのだけれども、それを伝えるというのは、これは微妙なところです。その事実を伝えて技術をそのまま受け継げるということは、ひょっとしたら必要ないかもしれません。だけれども、その事実は重いです。これを失ったときに本当に困ったということがもしあれば、そのときにどこかに残っているのを一生懸命集めて、また作り上げる。もしかしたらそのときに、前のより良くなるのかもしれませんが。こういうところがむしろ地育のある意味おもしろいところで、予測のつかないところだろうと思うんですね。

染谷市長

ありがとうございました。

今、北島委員から、大変深淵といますか、まさに教育だけではなくて、日本人論にもつながるようなお話をいただきましたが、北島委員の意見について何か、私もつけ加えたいとか、伺ってみたいとか。

濱田教育長

私は、伝統文化を守ることについて、余り堅く考えていなかったんですね。今、炭焼きの話が出ました。はつくら里の楽校でしたか、そこで炭焼き体験をやっていて、私も1回見学に行ったことがあります。キーワードは、伝統を保存するとか守るというよりも、子供たちにとっては楽しむだけなんです。それが僕はとても大事だと思うのです。楽しむという切り口でいろんなものを見ていく必要があると思います。

炭焼き体験を見ていたら、焼いた70センチから80センチぐらいの炭の打ち合わせてですね、きれいな音が出るのを楽しんでいましたし、すすだらけになった顔をお互いに笑い合っただけなんです。これこそ炭焼きの技能を保存するのではなくて、炭焼きに関わることで楽しむという世界があったのではないかと思います。

相賀谷太鼓だって、子供たちは伝統を守るという意識はありません。楽しんでやるという意識のほうが強いと思うんです。または、ある完

成した曲ができて、それを皆さんにお披露目することによって満足感を得ている。やり終えたときにやったという姿にそれが表れていると思うんです。

笹間神楽だって同じだと思うんです。やはり私は余り形にこだわった伝統を残す、守るという意識よりも、学校現場、または子供たちサイドから見ると、ただ楽しむということで、結果的に守るとか存続ということがあればいいなと思っています。

ですから、大人の思いだけで守るということは余り考えるべきではない、ということについては北島委員と同感ですが、学校現場で果たして大人の思惑に振り回されるような保存という意識があるかという点、私はないような気がします。

染谷市長

ほかにはご意見ある方いらっしゃいますか。どうでしょう。よろしいでしょうか。

〔発言する者なし〕

染谷市長

では、ちょっとここで一旦次の方ということで、牧野委員、いかがでしょうか。

牧野委員

感想としては、島田市はコンパクトシティを目指すのは非常に難しい都市だと思っています。それは、今の時点では各地域にいろんなメンバーがたくさんいて、それぞれの方向で自立し始めているのではないかなというのが感想です。

ある市の紹介を、神奈川県の方が見えて紹介をしてもらいましたけれども、そこは交通機関の駅が中心で、そこに集中していて、そこから広げるか縮めるかというような、コンパクトといいますか、そういった考えで簡単にできそうなイメージですけれども、島田に至っては、もう各地域がそれぞれのいいものを持っていますので、それをやりくりして小さくしていくというのは難しいなと感じました。

スライドを見ていて思ったのですけれども、最近、島田市の民間企業、私の会社も含めてですけれども、将来像といいますか、働く場をどうしていくかということがあって、やはり地元の子供たちに自分たちの地域の会社に入ってほしい。島田に住んでいてほしいという、ある意味、危機感を少し持っているような状況で、将来について真剣に考え始めている時期なので、これは地域のそういったコーディネーターの方とうまく話をすれば、もっと企業も地域と一緒に協働できるというかなという感想です。

ご承知だと思いますけれども、私どもも浄化槽の関係で、島田市は分散していますので、集中下水というのが大変難しいところもあります。浄化槽の普及もしていかなければならないというのが反面にあります。それを子供たちに教えておけば、10年経てばお客さんになってくれるということで、小学校にご協力をいただいて、環境教室を、

水の循環を教えながら浄化槽を知っていただくことをやり始めています。そういった教育をコーディネーターの方にうまく接することができれば、かなりいろいろなことができるということが少し見えてきました。

それから、もう一つ感想ですけれども、写真を見ると地元の方と子供たちが話している姿が大変誇らしくて、どんな話をしているのかなといつも思うんです。言葉の力というのは、年長の方から教えていただける。先週、七夕飾りをやったのですけれども、短冊に書く言葉が画一的といいますか、単純だったんですね。それを隣にいた年の方が、こんな方面で考えたらどうと言ってくれた途端、もう詩人のように言葉が出てきて、すばらしい短冊が書けるようになりました。そういったコミュニケーション力の向上には、すばらしいチャンスだというのが1つ。

もう一つは、自分が社会に対してどういうふうに関わっていけるのかというシミュレーションと言ったら失礼になるかもしれませんが、実際に仕事とか切実な生活ではないとは思いますが、その活動を通して、例えばお芋を煮てお菓子を作って、それをお年寄りでしたか、年長の方に渡す。そのときの自分の社会性というものは何かということをお子さんは多分考えて、一生懸命悩んだのではないかなと思います。どうしたらおいしいものができるか、どうしたらおいしいと言ってくれるか。そういった社会との関わりが、学校で先生から教わるのとは違って、非常にとてもいいなという感想です。

これは教育委員会の研修会で青汁の宣伝をやられた方が講演しまして、八名さんです。その講演の中でもらった言葉ですけれども、「沖縄のおばあが長生きするのは何で?」、「長生きの秘訣はね、人の役に立ちたいからだよ。おばあが長生きするのは人の役に立ちたいからだよ。」というお話をいただきました。これはすばらしいなと。生きがいを地域に見つけれたら、こんな幸せはないのではないかということで、地域の教育力を高めるとは言いますが、島田市民一人一人が生きがいを地域に見つける場だなど、スライドを見ながら考えました。

最後ですけれども、1つ、島田市の弱点を言いますと、幕末のときに島田にどんな人がいて、どんな活躍をしたかというのをもう少し深掘りしてもらいたいかなと思います。というのは、幕末の時代というのは、北島さんにもよく教えてもらったりしているんですが、言葉の世界が最高だったのではないかな、語彙ですよ。楽しみはから始まる何々のときという橘曙覧さんの詩が正岡子規、それから近年では俵さんの「サラダ日記」の短歌に反映してきていて、非常に分かりやすく、楽しみは何々のときという形で短歌が紹介されております。その言葉と含めて島田市の幕末、江戸末期から幕末、それから明治初

染谷市長

期の言葉について掘り下げたら、島田市はおもしろいのではないかなと思いました。

ありがとうございます。

どうでしょう、牧野さんのご意見を伺って、皆さん、聞いてみたいこととかご感想などありましたら聞かせてください。

いかがですか。

北島委員

以前にお話ししました橘曙覧のお話をさせていただきまして、ありがとうございます。これは「独楽吟」というタイトルがついていて、たくさんの歌を収録してあるものです。楽しみはという、つまり、先ほど教育長がおっしゃいましたけれども、楽しいことというのは究極の目的ですよ。人生を最後まで楽しみながら生きていける、これは人間の理想でありまして、子供のときから大人まで一貫して苦しみがなく楽しみだけの人生であったら、それはすばらしいんでしょうけれども、現実にはそうはいかないわけです。育てられる、それから育てる、こういうことは言葉、それから態度も含めて人を介して伝承されていくことだと思えます。橘曙覧は、言葉の力によってそのことを伝えたのだらうと思えます。全て「楽しみは」で始まる短歌です。苦しみはありません。全部、楽しみはこういうとき、こういったものを日常の何げない風景の中でつかまえては、それを表現していく。そしてそれを伝える。そうすると、子供たちも楽しみはこうやって見つけるんだということが自然に身につく。そうしたら、その子供がおじさんになったとき、お婆さんになったときに、やはり別の形かもしれませんが、そのことを伝えてくれる伝承者になり得るのではないかと思います、非常にこれは言葉を介して、橘曙覧のそのやり方というのはすばらしいなと思えますし、ぜひ島田でもそのような語れる人物があればいいなと、本当に同感です。思います。

染谷市長

ありがとうございます。よろしいでしょうか。

では、ひとまずここにして、次、秋田委員、いかがでしょう。

秋田委員

今の牧野委員のお話を伺っていて、生きがいを地域に見つけられたらどんなに幸せだろうかという言葉があったのですが、私も三ツ合町の寺子屋に関わらせていただく中で、自治会のほうで子供たちのために何か始められないかというところから始まった事業ではあったのですが、実際やってみると、楽しんでいたのはもしかしたら子供たち以上にボランティアとして協力していただいた元教員の方々だったのではないかなと思えるようなところもありました。一番高齢の方は80歳を超えていらしたんですけれども、本当に楽しかったとおっしゃってくださいましたし、英語の先生だった方は、その日のために英語のゲームを考えて、いろいろ道具まで用意をしてくださって、40人ほどの子供たちにゲームをやらせてくださいました。



地域で何かをやるといったときに、基本ボランティアの力が必要になってくると思うんですけども、それは役員さんであってもボランティアである。そう考えたときに、では、ボランティアというのは一体何なんだろう。人のために何かをすることがボランティアなのか。私もいろんな形でボランティアを今までさせていただいてきているのですが、人のためにやるのではなくて、自分がやりたい。自分がこうありたい。そう思うところから自分の意志で始まるところがボランティアなのかなと感じています。何か人のためにとすると形にこだわりたくなるのかな、こうしなければいけないになっていってしまうのかなと感じています。

本当に形には余りこだわらずに、やれる人がやれるときにやれる形で運営していくのが地域では長く続けていける秘訣なのではないかなと思っています。三ツ合町も今、ことし2年目ですけども、夏に向けて今準備が始まっていますが、まだばたばたしています。1カ月切っていますけれども、あそこはどうしよう、ここはどうしようとかばたばたしています。でも、そのばたばたする経験が今すごく大事なかなと。そこを通して地域らしい形にだんだん納まっていくてくれたらいいかなと思っています。

染谷市長

ありがとうございます。

今の秋田委員のお話を伺って、聞いてみたいこと、あるいはお感じになったこと、ありましたら聞かせてください。

濱田教育長

今の秋田委員のお話を聞いていて、先ほど社会教育課長から提案のあった緩やかなネットワークということとつながるなと思いました。私、このことがとてもいいことだと思います。加入も、それから脱退も欠席も参加も、ある程度自由度が高くて、義務感に捉われない自主的な参加が認められるような組織というんですが、緩やかなネットワークという社会教育課の言葉そのままのものが長続きをするコツではないかなと思いました。

子供のために何かをやってやろうという、そういう義務意識だけでいくと、これは大変なことだと思うのですよね。実は、フレンズ、放課後子ども教室を初倉南小学校区でやっていたのですが、今は岡田の公会堂を主会場としてやっているんですが、地域のボランティアに大変お世話になっています。子供たちが岡田の公会堂に行って、地区の老人会のお年寄りの人たちと触れ合うと、お年寄りがとても元気になるというんですね。だから、お年寄りにとってもメリットがある、お年寄りも、行けば子供たちの元気がもらえるという、そういう関係。ですから、多分老人会も義務で参加しているわけではないと思うんですよ。楽しみで参加して、たまたまそのときに子供たちが来ていれば触れ合い活動ができるという緩やかな関係だと思うのですが、この緩

やかな関係で地域のお年寄りを楽しんでいる。これは、自治会がある程度、会場の設定とか何かしてくれるのですが、自治会にとってもメリットがある。

子供たちだけのメリットを考えていくと、義務意識が働いて大変になってしまうけれども、自分たちにもメリットがある、地域にもメリットがあると考えていくといいなと思うし、そういう仕立てが大事だと思います。放課後子ども教室だけを考えるのではなくて、それにプラスアルファの価値をどう含ませるか、プラスアルファさせるかという視点があると、地域にとっても活動が楽になるし、地域にとってもその活動がメリットになる活動として長く続いていくことになるのではないかなと思います。

染谷市長

私からも一言。

きょうは今、地域の子供を育てるという話ですが、協働のまちづくりなどの話も、どうしてもそれを聞く人は義務感とかやらされ感とかをおっしゃって、そうしなければならないとか、行かなければならないとかと。でも、それは本当の意味での協働のまちづくりではないと思っていて、自分の得意なことで、自分の楽しいことで、自分がやりたいと思うことで参加していかないと、町は変わらない。

一番最初に北島委員が伝統もその時代時代によって変わっていくということですが、やはり市民参加のまちづくりというのも、専門のような、皆さんの結束が強くて、ある意味義務感があった、そういう時代の市民協働ではもうなくなってきていて、それぞれの人たちが自分のやれることを楽しいと思って参加できることを1人1つ活動をしていくことで町が変わっていくという考え方を私は持っています。やはり地育ということでも同じことかなと、きょう、秋田さんのお話を伺っていて思ったところです。

私も昔、一生懸命ボランティアをやっていましたので、やはり同じように誰かの役に立つというよりも、そのことが自分にとってどれほどはね返ってくる、得るものが多いかというほうに生きがいを感じていました。やはり地域にそういう喜びを知る人が1人でも多くなっていくと、子供たちを育てる活動に参加してくださる、そういった大人も増えていくのかなと、今思いました。

北島委員

蛇足かもしれませんが。ボランティアという言葉が何回も出てまいりました。こんなことでいいのかなと秋田さんおっしゃいましたけれども、そのとおりでいいと思います。ボランティアというのは、もともとはもっと重い言葉です。語源的には多分、軍隊用語なのです。志願兵というところがまず最初のスタートです。つまり、志願兵というのはどういうことかということ、争いがある、戦がある、そのときに自分が兵として参加するという事です。ということはどういうことかと

染谷市長

原委員

いうと、自分が死を覚悟しなければ行けないですね。それは人に、おまえ行けよと言われてたりするものではありません。自分で決めるしかない。だって、自分の命を削って行くわけですから。だから、まさにおっしゃるように、自分で判断して自分の責任の範囲でやること、自分が本当にできること、納得できることでいいと思います。

ありがとうございました。

それでは、原委員、お願いいたします。

きょう取り組みの中に川根小学校のみんなの学校というのが具体的に上げられて、私は川根ですので、大変うれしいなと思いました。

川根は、私が思うに、昔から地域でいろんなことに取り組むという風土がある地域ではないのかなと思いました。今は、川根は若者が大変元気で、川根町青年団も全国的な取り組みを展開したり、それからカワネラブズファクトリーという新しい、また同列になると思うんですが、お父さん、お母さんの団体ができ、大井川横断こいのぼりをやったり、それから子供たちを呼んでチャリムでイベントを開いたりというようなことをやったりして。本当に若者が元気というのは町にエネルギーを与えてくれるなと思います。

若者に負けないように、最近はお年のちょっと大きい人たちも、年齢の大きい人の音楽イベントを組んでみたり、それから抜里、笹間の観賞会という地域の笹間を大事に育ててみんなに見ていただくようなイベントを組んだりとか。それぞれのところで自分たちが興味を持ってやってみたいということに挑戦している方たちが大変多くいる地域だなと思います。

それで、今、成年の人たちや若者、30代、40代の人たちがいろいろなことに取り組もうとしている原動力というのは一体何なのかなと思うわけですが、やはり川根が好きだということではないかなと、それが一番思います。

それから、分かり合える仲間がいるということが大きな原動力になっていて、何か声をかけると賛同してくれる。その中にまたいろいろな意見の交換があるとは思いますが、自分たちの子供を交えて何か子供に楽しい思いをさせてあげたいという思いであふれていることがそういう活動を充実させていることになるのではないかなと思います。

では、そのお父さんたちは一体どこからそういう思いを持つようになったのかなと考えていくと、やはり学校、小学校や中学校での経験や学んできたことが大きいのではないかな。仲間を通して地域を知ってきたということが大きな経験ではないのかなと思いました。

川根小の取り組みの中にいろいろありますけれども、あれはここ一、二年で行われていることではなくて、やはり長い年月、これまでの先

輩の教員が作り上げてきたものをさらに今の校長先生がもっと大きく広げてくださったり、それから地域に学校だよりを通して学校の考え方を発信してくれたりしていることで、その学校の考え方が分かる。それを受けてというわけではないのですが、川根はさくらのまちだよりと、NPOで出している広報、ここで、川根を愛している人たちの思いを十分に伝えているというようなことも、すごく広がるもとを作る要因になっているのではないかなと思いました。

やはり小さいときの経験や思いというのが大事だなと思います。学校の中でそういうものを組んでいきたいという思いはすごくあります。最近はそのようなものがたくさん行われていますけれども、自分が教員をやっていた経験からいうと、限られた日数の中で文科省から出されている限られたカリキュラムをやっていかなければならない。そこにこういう地域との関わりをどう入れていくかというのは大変、簡単にできることではないと思います。全ての教科の中を網羅して、地域と関わりあるものをどうつなげていくか、そういう工夫がとて求められます。総合学習や生活科が生まれたおかげで、扱いやすくなっているとは思いますが、もっともっと広げていくことを考えていくと、教科の狙いやそれから、それが地域とどう組むことができるかというのを先生たちが十分検討して、目標が文科省から出されている教科の目標等と上手に組み合わせさせていけるような教育課程の再編というのがすごく望まれることだと思います。

ですから、難しいことではあるのですが、でも、やっぱりやっていかなければいけないことだと私は感じています。とにかく小さいときに学んだ経験や多くの人と関わったこと、友達と仲間としての意識を育てていったこと、それらが大きくなって、ここをもっと大事にしていきたい。それから、もっとみんなが楽しむようにしていきたいという思いも育てることになるのではないかなと、これは私個人の感想ですが、思いました。

染谷市長

ありがとうございました。

まさに川根の若い人たち、川根の住民が本当に川根を愛しているということをいつも地域に行くと感じているものですから、その源というか、それを感じさせていただくようなお話でした。

原委員のご意見に対して何か聞いてみたいことや感想がありましたらお願いいたします。いかがでしょうか。

北島委員

原委員はとてもすばらしい学校の教員経験者であられまして、その体験を通してお話をさせていただきまして、なるほど、すばらしいなと思いました。

おもしろいなと思ったのは、私たちは40年、50年、私の場合はもっと前かな、60年前にはまさに育てられるべき子供であったのですね。

それが親とかおじさん、おばさんとか、それから学校では先生方とか、それから近所の小父さん、小母さんも含めて、いろんな人にその地域地域で教わってきました。育ったところは愛着はあるんですけども、残念ながらもう何十年とほぼ行っていない。私はよそ者ですので、このすばらしい島田にたまたま仕事があるから、仕事がらみでやってまいりまして、そのまま仕事を辞めてもいついてしまっている。非常に住みやすいところであるということを見つけたわけでありませぬ。

皆さん、今、見渡しますと、やはり何十年、その数字は違うかもしれませんが、そのような時代を過ごしてこられて、今、島田で暮らしていらっしゃるわけではありますが、結局、住みやすいと思ったところ、愛着のあるところで暮らすのかということ、案外そうでもないのではないかと思うんです。そうでない人もいっぱいいらっしゃると思いますし、また私たちの子供たちは、やはり島田が大好き人間なんです。ですが、残念ながら島田に住んでおりませぬ。それはそれでよいのではないか。人間どこへ行ってもその土地その土地の価値を見つけて、それで親しむことができる、そういう感性といいますか、神経といいますか、センスといいますか、そういったものを、やはり多様な地域のもの、こと、それから人です、教育をされて、そして育つということが実際には必要ではないか。ここが好きだから、ここに住まなければ意味がないのでは全くないのですね、全く関係がないわけでは。どこでも住める、どんなところでも住める。そして楽しみを見つけることができる。そうすると一生楽しく過ごせるのではないかと思います。

そこで、この間、新聞で切り抜いておいてあるのですが、校歌というのが学校文化の一つにあります。これはほかの国にもあるのか分かりませぬが、日本では例外なく校歌というものがあります。これは京都産業大学の教授で小林一彦という人が書いている記事なのですが、この校歌というものがいかにその人間の生活に重要な役割を果たしているかということをいろいろと書いてあるんです。例えば山、川、山河のような自然を読み込んであったり、子供に対する成長の期待をそこに込めてあったり、いろんなことがあるわけです。

もう1つ紹介しておきたいのは、釜石小学校の校歌です。前、教育委員会でも紹介したことがあるのですが、東日本大震災で生き残った、釜石では大きな被害はなかった、子供たちの命には被害はなかったようであります。これが本当に役に立ったのではないかというような内容の校歌である。井上ひさしの作詞ですけれども。困ったときは目を上げてとか、困ったときは慌てずに、困ったときは手を出して友達の手をしっかりとつかむとかです。星を目当てに真っすぐ生きるとか。何か困ったときに、突然起こった災害のときにでも、これが心の支え

染谷市長

になって行動を決めてくれるということなのかなと思いましたが、例えばこういう校歌もあります。それから、自分の故郷を離れても、何か困難なことに遭遇したときに、それをふと思い出して、そしてふるさとではやはり友人が頑張っているとか、親が頑張ってくれているとか。いろんなことを思い出して元気をまたもらう。その一つの仕掛けになっているのかもしれませんが。この校歌というものを、もう既にこれ以上つけ加えることはありませんけれども、既にあるということは、これは幸せなことだなと実は思っています。大きな財産だろうと思います。

ありがとうございました。

ほかにはご意見いかがでしょうか。よろしいですか。

きょうは、地域の教育力を高める取り組みということでいろいろお話をいただきましたが、具体的な活動というよりも、どちらかというところに向き合う人であったり、伝統を守るという考え方であったり、それから、それぞれの地域が自立をし始めているという牧野さんのご意見もありました。そしてまた、地域を愛する気持ちを育てるということは、小さなときからの経験や思いが大事だというような原さんのご意見もいただいたところです。そして、まとめのように、北島さんからは、その土地土地で、そこに生きる価値を見つけて生きていくことのできる人間を育てていかなければならないんだと。ずっとここにいるということが仕事等でかなうばかりではないというようなお話もいただきました。

そうした中で、やはり私どもとしては、島田をふるさとにする子供たち、その根っこをどう作っていくのかということについては、今、教育委員会もさまざまな取り組みを、そしてまた地域もさまざまな取り組みをしてくださっています。今、島田は、一番最初の挨拶にもありましたが、こうした地域の活動、あるいは社会教育、非常に熱心に、そしてまた充実しているとは思っておりますが、さらに子供たちに島田を好きになってもらうためにどういうことができるのか。あるいは将来の島田の活性化に向けて、私たちは子供たちにどんなことを伝えていく、あるいは教えていく必要があるのか。その地域の行事や自治会活動等もそうですけれどもね。こういった話をして、最後に皆さんのご意見を聞いてまとめていきたいと思うんですが、私は感動する言葉を先日、初倉で聞いたんですが、自治会長さんの挨拶の中に、中学生の皆さんに向かって、ぜひふるさと初倉を体感していただきたいという言葉がありました。全身を使って、このふるさと初倉と言っていますが、島田を味わってほしい、そしていろんな経験を通して、ここで育ったことを誇りに思う子供たちに育ってほしいという気持ちがあふれるご挨拶でありました。

北島委員

最後に、もう一言ずつ皆様方に島田に住む子供たちに島田を好きになってもらうために我々どんなことをこれからやっていけばいいんだろうか。あるいは、人口が減っていく時代にあっても、この将来の島田市が活性化していくためには、我々にとって宝物である子供、どう向き合っていけばいいのかということを一言ずつ伺ってまとめにしたいと思います。

そうですね。とにかく子供たちには楽しんでほしいということです。そして、私たちはよいおじさん、おばさんになりたいなと思います。そのときに、将来の島田市の活性化を目指してということが動機にあったとしても、それは期待しない。無償でよろしいかと思います。サンタクロースで、いつの間にか消えて忘れられる、これがベストだと思います。

染谷市長  
牧野委員

分かりました。ありがとうございます。

全ての人には悩みを持っている。悩みのあるのが人生。その悩みを乗り越える力も持っています。という言葉をお子たちに伝えたいなと思います。社会教育の活動を通して育てただけだとありがたいと思います。金谷の茶まつりでボーイスカウトのスカウトが引き手としてこの役があるんですけども、そのときだけみんなが集まって2日間汗を流すわけですが、何の悩みがあるとも言いません。とにかく2日間楽しんで、また都市に帰る子、ほかの地方に行く子、また散り散りになりますが、茶まつりのときだけ、何も悩みもなく楽しめる時間が彼らにはあります。そういった時間がたくさんできるといいなと思います。ありがとうございました。

秋田委員

きょう話題になったのは割と小学校が多かったのですが、実は先日急病人が出た場所に居合わせまして、そのときにAEDを近くの施設にとりに行ってくれたのは中学生の男の子でした。大人がAEDを持ってきたほうがいいのではないという声を聞いて、僕がとりに行ってきますと声を上げてとりに行ってくれました。そんな姿を見たときに、今、防災訓練、年々中学生、高校生の参加が増えてきているように思います。今見ていると、かなり受け身で、大人から指示されたことをしているという状態ですけども、中学生というのはそういうことができる年齢なんだというのを実体験したときに、防災訓練という場も地育の場として大きな可能性を秘めているのではないかなと思います。

なかなか中学生、高校生が地域の方と触れ合う場というのがないものですから、本当にそういう場を今後生かしていけたらいいなと思いました。

染谷市長  
原委員

ありがとうございます。

自分のことでいいますと、孫を保育園に送りにいきます。そして、

孫の支度をして帰ってくるんですが、その間に小さい子供たちに声をかけて、ハイタッチをして、きょうも元気でねと、そして別れてきます。そうすると思ったより帰ってくるまでに時間がかかります。でも、次の日また行くと、ばあば、またジャンプしてとか、やってとかというふうにしてつながりができます。そういうのがどんどん広がっていくことが幸せだなと感じます。子供が自分のことを覚えてくれる、関わりを持とうとしてくれる、それも幸せなことだなと思います。

やはりつながりをつけていく、関わりを増やしていくという場면을意図的にやっていかないといけないんだなと思っています。

それから、昔は子供会というのがありましたよね、地域ごとに。そこで世話人の方にもお世話になったし、それから子供同士のつながりというのがすごくできていたと思いますが、今はその子供会もなくなってしまっているので、うちの地域は小学校に上がっていないのに保育園の3歳児から子供会に入ると言われて、その仲間に入って会費も納めて活動もやってという形になっていて、年齢に関わりなく地域の人たちが子供をみんな束ねようという工夫してくれています。そういうのもありがたいなと思いました。

とにかく関わり合いを持ってつながりをつけていくということが大事なのかなと思いました。

ありがとうございました。

教育長、お願いします。

さまざまなお話を聞いて、私も大変参考になりました。一番最後にお話をいただいた原さんのことから少しお話をしたいと思います。

子供の成長、自分の孫だけでなく、近所にいる子供たちと触れ合うこと、関係を作ること、またはその成長を見守ることが楽しみだという、この話はとてもすてきな話だと思いました。やはり組織で何かをやるというだけでなく、個人としてできることというのに目を向けることはとても大事ではないかなと思います。

北島委員も稲作をやっていて、教育センターに来ている不登校傾向の子供たちにその体験学習をさせるてくださっています。これも個人で行っている活動だと思うのですが、そういう意味では、自治会のように組織でやるものだけでなく、個人でやっていく地育というんですか、地域の教育力というものにも目を向けていかなければならないと思いました。

私も自分の孫が小学校2年生なものですから、その子供たちのために、学校のすぐ近くの畑にレンゲをまきました。レンゲ畑で遊ぶということを子供たちに体験させたのですが、これは小学校の子供たちのためにと思ってやったのですが、近所の幼児を連れてくるお母さん方

染谷市長

濱田教育長



が私が通ったときに、家の子供にもレンゲ畑で遊ばせてもらえませんかというもので、どうぞ、どうぞ好きなだけ遊んでください。どうせこの後、トラクターで耕してしまうところだから、幾ら踏んづけても幾ら花を摘んでもいいですよと言ったら、大変喜んで、中に入って楽しんでくれました。こういうことというのは、考え方によっては誰でもできるのではないかなと思います。自分で夏野菜を育てて、少したくさんでき過ぎたら近所の子供たちにちょっと収穫体験をさせることでもいいし、やろうと思えばいろいろできるのではないかなと思いました。

それから、ある地域の方と話をしましたら、自分は見守り隊として登録するほどのことはできないけれども、でも、子供が下校するときに庭先に出て草取りしていますと、話をしてくれた人がいました。これだって個人のできる地域の力ですよ。ですから、毎日交差点に立って旗を振るということもとても大事だし、これも島田市は大変大勢の方が関わってくれて大きな力になっていると思うんですが、でも一方で、今言ったような登下校のときにちょっと庭先に出てという、この活動もとても価値のある活動だと思うんですね。ですから、そういう方々が地域に1人でも2人でも増えてくれたらいいなと思います。

原さんのように地域の子供を温かい目で見守るということも誰でもできることではないかなと思います。挨拶一つする、またはちょっとタッチするだけでも、それはあるのではないかなと思いました。

このごろ市長が、これからの変化の激しい時代には、知識はすぐに陳腐化してしまうから、まさに体験して、要するに体感したものが力となるというんですかね。もっと言うと、IQよりもEQだというような話もありましたが、そういう部分の育ちというのは、まさに地域の皆さんのお力によるところが大変多いのではないかなと思っています。参加できる子供たちが参加できるようなイベントに参加する。それから、今言ったように個人でできるところに個人の関わりの中で、子供が育まれたらすばらしいなと思いました。

もう一方で、地域の人たちに知ってほしいのは、島田市はジュニア防災士というのを大変力を入れています。毎年700人以上の子供たちがジュニア防災士の資格を取っているわけですね。この子供たちは生かしようによっては大きな戦力になると思うんですね。若干まだ地域の防災訓練の中でその子供たちを生かしてきれていない、生かせば必ず戦力になると思うんですね。そういうこともあると思います。

それから最後になりましたが、北島委員から、校歌の話が出ましたが、私は島田市の自慢は、市歌が歌える子供たちが、多分ね、私の想像ですが、思い込みですが、静岡県で一番多いと思うんですね。小学校の音楽発表会、会場にいる子供たちは全員そらで市歌を歌います。

染谷市長

私自身、長く島田市民にいましたが、古い島田市歌というのは知りません、歌えません。でも、今の子供たちはそらんじで歌える子供たちが増えている。とてもすてきな歌詞の島田市歌ですから、その島田市歌が歌える子供たちが多いということも、ある意味では島田の地育だと思っています。

ありがとうございました。

多くのご意見をいただきました。また、教育長にはまとももしていただきました。島田市歌に対する思いというのは、私もこの島田市歌を歌い続けることを10年続ければ、本当に20代の人たちまで歌えるようになる。島田市民がみんな島田市歌を歌えるというのは、島田市歌のアイデンティティーを作るところでも、大変意味のあることかなと思っています。

本日は、短い時間ではありましたが、率直なご意見交換、ご意見をいただきまして、本当にありがとうございました。皆様からいただいたご意見をもとに、今後社会教育活動のさらなる充実に取り組んでまいりたいと考えております。

冒頭の挨拶でも申し上げましたとおり、子供たちの健やかな成長には、地域の皆様の協力が不可欠でございます。島田に生まれて良かった、他県に行っても島田を自慢したいと思える子供たちが今後増えていくように市民一丸となって取り組んでいければと思います。よろしくお願いを申し上げます。

私からも自治会の皆様にお会いする機会等において、働きかけを行ってまいりたいと思っております。

それでは、以上をもちまして、第1回総合教育会議を閉会いたします。

次回は10月18日を開催予定としておりますので、よろしくお願いをいたします。

本日は、お忙しいところまことにありがとうございました。

事務局のほうにお返しをいたします。

それでは、長時間にわたりまして、まことにありがとうございます。教育委員会といたしましても、皆様のご意見等を参考にして、現在の取り組みを充実すると同時に新しい取り組みに対しましても力を入れていきたいと考えております。

本日は長い間ありがとうございました。

畑教育部長

閉 会 午前11時38分

|